

中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて —キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査(2024年)—

紺谷 亮一 ノートルダム清心女子大学文学部教授

山口 雄治 岡山大学文明動態学研究所助教

フィクリ・クラックオウル アンカラ大学言語・歴史・地理学部教授

Investigation towards the Understanding of the Chalcolithic Period in Central Anatolia: Excavations at the Central Trench, Kültepe, Turkey (2024)

KONTANI, Ryoichi Professor, Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University

YAMAGUCHI, Yuji Assistant professor, Research Institute for the Dynamics of Civilizations, Okayama University

KULAKOĞLU, Fikri Professor, Faculty of Languages, History and Geology, Ankara University

中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡中央トレンチ発掘調査(2024年)—

1. はじめに

キュルテペ遺跡はトルコ中央部、カイセリ市の北東約20 kmに位置する(図1左)。1925年に粘土板文書が大量に発見され、1948年以来現在に至るまで継続的な発掘調査が行われている。これまで前期青銅器時代からローマ帝国時代までの活動痕跡が明らかにされていたが、中でも中期青銅器時代のアッシリア・コローニー時代の物質文化は質・量ともに豊富であり、西アジア史の中でも欠かせないものとなっている。こうした成果から、2014年には遺跡全体がユネスコ世界遺産暫定リストに、2015年には中期青銅器時代の約25,000枚もの粘土板文書がユネスコ世界記憶遺産に登録された。その一方で、なぜ中期青銅器時代に遺跡が大規模化したのか、すなわちキュルテペ遺跡における前期青銅器時代以前の考古学的状況についてはほとんどわかっていなかったといえる。実は、広くアナトリア中央部を見渡しても、後期銅石器～前期青銅器時代の調査遺跡は限定的で、しかも両時代を連続的に捉えた遺跡はごくわずかであった。したがって、本地域における前期青銅器時代以前の状況も不明確であった。

私たちは、この問題を明らかにするために、前期青銅器時代以前における文化編年の構築を目的としてキュルテペ遺跡での発掘調査を2015年から開始した(図1右)(紺谷2020、紺谷・クラックオウル2022)。これまで北トレンチ・西トレンチと調査を行い、前期青銅器時代の物質文化の変遷を明らかにしてきた。

2021年からは中央トレンチの調査を開始し、後期銅石器時代の文化層を捉えることにより成功した(Kulakoğlu et al. 2024、紺谷ほか2020・2021・2022・2023・2024)。

2024年度は、2024年8月5日～9月4日まで発掘調査を行った。中央トレンチを東側に拡張し、ジグザグ建築址の東端を捉え、その規模に関するデータを得るためである。

2. 第6回キュルテペ国際学会の開催

調査内容とは直接関係ないが、調査の開始前である2024年8月1日～4日にかけて、第6回キュルテペ国際学会(The 6th Kültepe International Meeting)が開催されたことについて記しておきたい(図2)。キュルテペ遺跡の調査キャンプ内に大型テントが設置され、その中で主に銅石器時代～鉄器時代を中心とした様々な研究が披露された。30本を超える発表がエントリーされ、およそ80人が参加する大規模な大会となった。日本からは、紺谷がキュルテペ遺跡中央トレンチにおける後期銅石器時代層に関しての最新成果を、山口が同トレンチ出土土器に関する編年について詳細な分析結果を報告した。

当学会には数々の著名研究者が参加していたが、その中にテル・レイラーン遺跡の発掘を指揮したH. ワイス教授の姿があった。彼は、かつて北シリアで前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけての過渡期に汎西アジア的な気候変動を想定し、これに関する多くの論考も発表してきた。2024年からワイス氏は、同様

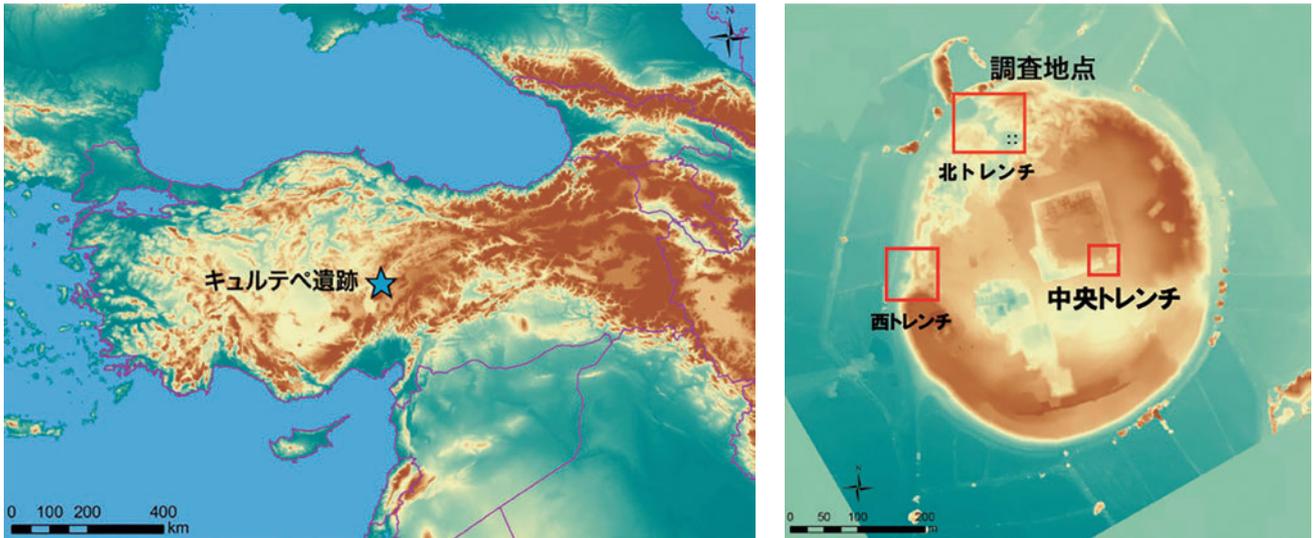


図1 キュルテペ遺跡の位置(左)と遺跡地形測量図・調査地点(右)
(左は SRTM3 データを使用して作成、右の地形測量図は早川祐弼氏作成)



図2 学会会場・発表の様子

にキュルテペ遺跡において当該時期の気候変動の有無を確認する為に、テル南西部にトレンチを設定し、主に層序ごとに大量の植物遺存体を採取していた。

3. ワルシャマ宮殿内に残存する後期銅石器時代文化層

キュルテペ遺跡のテペ中央部には、前2千年紀前半のワルシャマ宮殿が位置する。この宮殿は1954～1962年にわたってT. オズギュッチ教授によって発掘調査され、キュルテペ遺跡(古代名カネシュ)にワルシャマ王が存在し、当時アナトリア南東部にあったとされるママ国と書簡を交わした事がわかっている。

当宮殿は一辺約100mの矩形を呈しているが、宮殿中央部は1925年にB. フロズニー氏による発掘によって大きく削平されている。基礎はブロック状の石材で、厚いところでは幅は数メートルを超える大規模コンプレックスである。宮殿北部はデポ区画とされ、小部屋によって多くの仕切りが見られる。また、残存する壁体は上部構造の荷重に耐えられるように、半地下もしくは、基礎をつくる際に地面を意識的に掘り下げたり、整地した可能性が高い。つまり、現在私たちが発掘調査をしている中央トレンチ上にはかつて前期青銅器時代に建造物があったが、中期青銅器時代のワルシャマ宮殿によって大規模に削平されている事がわかる。2021年に中央トレンチ表層直下で後期銅石器時代層が確認できたのにはそのような理由が考えられる。

4. ジグザグ建築址のコーナーを確認

今年度は、ジグザグ建築址のプラン確認の為に、中央トレンチ東側を部分的に10m拡張し、掘削した



図3 中央トレンチ遺構配置図



図4 ジグザグ建築址南東コーナー部と土壘状遺構

(図3)。その結果、当該建築址のコーナーを確認することができた。コーナー部は想定したよりも東寄りであり、ワルシャマ宮殿建造時の削平を免れていた。建物の軸は北に伸びている。次年度はこの壁を追う予定である。

興味深いのはコーナー東側に土壘のような施設が見つかった点である(図4)。断面を見ると版築のように日干しレンガ片や粘土が突き固められていた。当該施設は中央トレンチの最東部に位置し、方向的には上記のジグザグ建築址同様に北北東に伸びていることから、

(ワルシャマ宮殿が立地する)高所部全体を囲んでいる可能性がある。但し、現時点ではジグザグ建築址との年代的、機能的な関連性については不明である。

出土遺物はこれまでとほぼ同様の内容であったが、本建物址の Room1 と名付けた部屋から出土していた大型埋納土器の復元が完了した(図5)。検討の結果、アリシャル・ホユック遺跡やアルスラン・テベ遺跡出土の黒色磨研土器と酷似している事が確認できた。

5. おわりに

2024年度の調査では、ジグザグ建築址が更に北へ伸びること、さらに並存する土壘状遺構がテルの高所部全体を囲む、周壁のような存在であることが確認できた。ジグザグ建築址上には前期青銅器時代Ⅱ期、中期青銅器時代前半、中期青銅器時代後半のワルシャマ宮殿が建築されている。つまり、当該建築址を含めると凡そ1,000年間に少なくとも4回にわたって同区域に大規模建築址が営まれている。今後の調査ではこの点にも留意していかなければならない。

本研究は、JSPS 科研費 JP24K04360、JP24H00098、RIDC2024 年度共同研究の助成を受けたものである。



図5 Room1 出土土器

参考文献

- ・ Kulakoğlu, F., R. Kontani, A. Uesugi, Y. Yamaguchi, K. Shimogama and M. Semmoto 2020 Preliminary Report of Excavations in the Northern Sector of Kültepe 2015-2017. *Subartu* 45: 9-88.
- ・ Kulakoğlu, F., R. Kontani and Y. Yamaguchi 2024 Discovering the Late Chalcolithic Period at Kültepe: Excavation of the Central Trench (2021-2022). *Subartu* 51: 179-184.
- ・ 紺谷亮一 2020 「趣旨説明：アナトリアにおけるメガシティの起源」『日本西アジア考古学会第25回大会要旨集』日本西アジア考古学会 9-10 頁 (http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2020/10/25thJSWAA_abstracts.pdf)
- ・ 紺谷亮一・F.クラックオウル 2022 「キュルテペ遺跡の都市性とその評価」『西アジア考古学』23号 137-144 頁。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・下釜和也・フィクリ・クラックオウル 2020 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2019年—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』49-51 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2021 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2020年—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』59-63 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2022 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2021年—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』97-99 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2023 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2022年—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』22-25 頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・フィクリ・クラックオウル 2024 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2023年—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』26-29 頁 日本西アジア考古学会。